

「稲苗新語」の著者丸山祐義

土 井 寛 申

大分市在住の郷土史研究家立川輝信君が昭和三十五年四月二十三日発行の毎日新聞「大分版」の「蔵書の中から」欄に「稲苗の畑植え増収を県に建言した八十五年前の研究」と題し発表せられたのが本書「稲苗新語」であり著者「丸山祐義」は杵築の人とあるので其の人に就いて調査してほしいとのことであつた。

然るに現在杵築には丸山姓の人は無い、但しあまり古いことでもないので市役所に出かけて除籍簿を一覧することにしたが、残念なことには前の町役場倉庫が昭和二十一年八月二十六日隣家の出火で類焼し、除籍簿は残っていない。只当時執務上の必要で倉庫から取出してあつた、たつた一冊の除籍簿があつたので入念に調べて見たら丸山姓のもの数人を発見した、然し其れ等の子孫はどうなつているか分らぬ、辛うじて探し出したのが分家の子孫である一人の中溝ヤエさんという老婦人である。本人も祐義という人物は知らぬが菩提寺

が寺町の正覚寺であるとのことで同寺を訪い明治八年以後の過去帳や位牌を全部調らべて見た。ところが次の様な位牌が見つかった、夫れには

「祐啓接運信士、明治十五年六月六日」、

牌裏に「丸山武吉」とある、過去帳によれば丸山ツヤ父とある、中溝老婦人の言によれば武吉なるものは本家の主人で市内谷町に住み山里屋という呉服屋であつた。自分は分家した其の弟の女である、武吉は商売より文筆に親しむことを好んで居つた、墓は正覚丸の寺山家分家の一隅に在るといふ。山里屋の跡は明治時代から亀井という時計店になつて居る。

本人が文人でもあつたことは著書中讃歌を寄せている連中の顔触れを見てもうなづけることであり物集高世の歌集「採花集」にも祐義として此等歌人と名を列して居る。最後に墓を探して見たら個人墓ではなく高さ三尺に満たぬ観音立像を思わせる自然石に「丸山代々塚」とあり背面に「明治十二年祐義建」と彫つてある。武吉という本名は文人らしくないので祐義なる雅名を用いたものであろう、法名に祐字を冠したのも偶然ではあるまい、今のところ此れ以上は身上調査が出来ぬのが残念だ、今仮りに略系図を作つて見ると次の通り。

祐義略系図

